闘病記からパワーもらう

体験共有が患者癒やす

専門古書店への注文急増

闘病記が根強い人気を保っている。病気を抱えながら、勇気をもって生きていこうとする姿が感動を与えるのはもちろんだが、実際に病気になった患者にとっては、刺激を受け、エネルギーをもらえる〝癒やしのツール〟になっている。専門に扱うネットの古書店もあり、注文が増加中だ。

みずほ信託銀行副社長の関原健夫さんの「がん六回人生全快」（朝日新聞社）や、元NHKアナウンサーの池田裕子（絵門ゆう子）さんが書いた「がんと一緒にゆっくりと」（新潮社）といった書籍が話題を呼んでいる。こうした闘病記はかつては文学者など一部の著名人が書き残すだけで、出版も年に数冊とそれほど多くはなかった。

それが一九七〇年代に入って急増、九〇年代には年間百点を超えるように。九四年には百四十点を数えた。治療法などについての情報が豊富になり、ごく普通の人まで書くようになったためらしい。自費出版が大半だ。著者が生きた証しとして書き残すとか、自分の思いを家族に伝えたいという本も多いが、「病人の先達として苦労した経験を、同じ病気に悩む人のために残したい」という前向きな動機も目立つ。

特に難病の場合など、原因不明と診断されたりして、病名が確定するまでに曲折がある。病気への対処法、治療のあり方、手術への心構えはもちろん、家族が気をつけるべきこと、さらには病院への不満などが体験に基づいてこと細かく書かれた闘病記は、患者にとって医師のアドバイスとはひと味違う生きた参考書となる。

治療法は医師、ケアは看護師が専門家かもしれないが、病気の苦しさ、病気のもたらすものに一番通じているのはその病気の患者自身だ。体験を共有することで、薬では得られない新たなエネルギーや元気をもらえるのが闘病記といえる。

○　○　○

さいたま市にある日本で唯一の闘病記専門古書店「パラメディカ」（http://member.nifty.ne.jp/PARAMEDICA）ではインターネットで注文を受け付けている。

店主の星野史雄さん（51）によれば、ここへきて注文が急に増えているという。理由としては、①同じ病気の人が情報交換したり、お互いにケアしたりする「患者会」の活動が活発で、ここで闘病記が話題になる②病院内に患者図書館を設置するところが増えており、国立長野病院の〝楽患ライブラリー〟など闘病記を置く例がある③ネット上に、闘病記をつづるサイトが急増しており、その相乗効果で注目が高まった――などが考えられるという。

パラメディカは九八年の開店。九三年八月、当時四十歳だった妻が乳がんになったとき、神田の古書店で手に入れた乳がん患者向けの米国の本が参考になった。「専門書ではよくわからなかったこと、例えば治療にどれくらいの期間かかるのか、患者への精神的ケアはどうしたらいいのか、夫や子供へのケアも大切だといった包括的な内容で感動した」と星野さんは振り返る。

妻は手術したが、肺などに転移して四年後亡くなった。星野さんは、その後、埼玉、東京をはじめ関東一円の古書店を回って闘病記を収集、パラメディカを開店した。初めは店頭でも販売していたが、インターネットの発達で現在はオンライン専門店に。百九十種類の病名別に一万二千冊がそろっている。乳がんだけでも八十三冊あるという。

○　○　○

「医師が一人前になるのに何人もの症例を見るのが必要だが、患者も、同じ病気の人の闘病記を最低三冊読めば、自分の病気のイメージをつかむことができる」と星野さん。「病気を克服した闘病記を読みたいというのが人情だが、登場人物の生死にかかわらず読まれている」と続ける。

「これから入院するが、この病気の闘病記を病院へ送ってほしい」という注文を受けて直接病院に発送したり、「子供が脳に障害があるが、同じ経験の本はないか」と若いお母さんから携帯電話で急ぎの電話が入ったりと、エピソードにはこと欠かない。「医者ではないが、医療相談もよく受ける。〝病友〟というか、同じ病気の人を探す手伝いをしてあげるのが私の役目」と話す。

「いのち輝く―闘病記100冊から学ぶ」（看護の科学社）の著書がある山梨県立大短大部の前助教授、前田志奈子さんは「確かに闘病記は増えている。病気と闘う人というのは、人間がいろんな困難を乗り越えて成長していく存在であることを教えてくれる。書く人も書くことで癒やされ、病気とむき合えるのではないか」と解説している。

（編集委員　原田勝広）

闘病記専門古書店「パラメディカ」店主の星野さん

パラメディカ推薦の「励まされる闘病記」

書名（出版社）	著者	内容
知りたがりやのガン患者（農山漁村文化協会）	種村エイ子	子供たちに「死生学」を教えている司書の著者が胃がんの体験つづる
看護婦ががんになって（日本評論社）	小笠原信之 土橋　律子	ホスピス運動に打ち込む元看護師、土橋さんの子宮がん体験記
わかったか、白血病。相手みてからけんか売れ（メディアファクトリー）	池田　泰佑	白血病を生き延びた15歳の少年のツッパリ日記
リハビリ医の妻が脳卒中になった時（日本医事新報社）	長谷川幸子 長谷川　幹	医者の妻の看護師が脳卒中で倒れ、リハビリ専門医が奮闘
わたし糖尿病なの（医歯薬出版）	南　昌江 南　加都子	幼児からインシュリン依存型糖尿病の女医とその母の前向きな本